

4 蘇悉地羯羅經 卷下奥書

(卷下朱書)

「寛弘五年四月十八日誦了、南御室」

(卷下白書)

「承保元年十一月廿八日於高野山中院明算

山籠奉受了 寛智

(卷下朱書)

「天仁元年十二月十五日華藏院律師傳授了

沙門聖恵

5 白河上皇高野御幸記

廿七日、甲辰、天晴、寺家献菓子御菜等、御厨

子所供御膳、御與之後、指廟堂參御、権大納言源朝

臣・師忠・権大納言源朝臣・右大弁藤原朝臣・師信朝臣・頭

季々々・為章々々・隆時等、各着衣冠、自余之輩、或

称不隨身衣冠之由、各着烏帽、上下装束、改日来

着用之色、先丹生・高野等明神并眷属諸神料、

被奉白妙御幣三捧、依長者定賢申、不差別使

付之寺家、先例參詣此山之人、依為地主明神、必奉

幣帛、尋其由緒、昔誉田天皇、割山地、定四至之、丹

生明神、当大師草創之時、明神付属此地、于今嘗其法

味、為寺善神故、必得此幣也、辰剋出御如例、自中院、至

廟下卅六町、各立卒都波、注行程如先、竹箭夾路左

右林木、大師出此山之三德記之、登山巔、遂無嶮岨、

是其一也、(以下略)

6-1-1 陶製經筒外容器

(蓋裏銘)「諸行無常 是生滅法 / 生滅々已 寂滅為樂 /

永久二年 (甲午) 九月十日 (壬午) 奉埋之尼

法葉」

6-1-3 比丘尼法葉願文

弟子比丘尼法葉、懇丹一心啓白三

宝、仏日円明之輝、雖隱西顧之山、法水

流布之浪、猶留南浮之境、滅罪修善

宜在斯時、弟子已受女身、雖懺業

因之至拙、幸遇仏教、又知機縁之相

催、是以落飾為尼、染衣帰仏、以出離解

脱之計、為造次顛沛之望、就中、従少

壯時至衰暮刻、深愍受苦之群類、常動

利生之慈心、彼胎卵湿化皆是弟子

所歷之生也、魚虫稟獸豈非弟子所

受之身乎、遞為父母親族、代為朋

友知識、多劫多生有恩有義、爰因

縁和合之時、暫成親愛之思、妄想分

別之日、還起殘害之心、断他命以養

我命、傷他身以飾我身、深着我執如忘

他苦、生死無辺之海所以弥深、分段五

濁之波因茲区清、輪廻舞際職而斯由、

拔濟之志寤寐無忘、弟子往昔未有

此思故、漏無數諸仏之引摂、今生始

発此願、欲為六道衆生之依怙、仍自

往年之比、手自転読千部法花経、

至于結願之今、又抽方寸之匪石、抛

随分之淨財、奉造立二尺普賢像、奉

書写金字妙法蓮華経一部八卷、無

量義・観普賢・阿弥陀・般若心等経各一

卷、便調香花之妙供、方設供養之

新儀、以所生慧業、普及於一切、令九

界会仏界、令六堂入仏道、又以斯経

卷、埋高野靈窟、黄金為字、依思其不

朽也、赤銅為器、依慕其不壞也、為期弥

勒慈尊出世之時、殊占弘法大師

入定之地而已、仰願慈尊兼憐愍

斯願、伏請大師常護持斯経、必接其

三会之座席、再開斯一乘之卷軸、

弟子得宿住通、憶念前身之

所作、衆会皆作希有想、随喜前仏

之所説、願力不空、唯仏知見、敬白、

永久二年三月十五日比丘尼法葉敬白

6-1-4 金銅宝篋印塔 南保又二郎

(銘文)「大師 / 御入 / 定奥 / 院埋 / 土中 / 安置 / 高野 /

山八 / 葉峰 / 上南 / 保又 / 二郎 / 入道 / 遺骨 /

也弘 / 安十 / 年六 / 月二 / 十二 / 日卒」

24 太政官牒写

太政官牒金剛峯寺

応任去年綸旨・院宣・国司庁宣等為

高野山丹生社領停止 勅事・院事・伊勢

太神宮工役夫・造内裏已下大小国役令

庄号致聖朝安穩異国降伏精勤

和泉国近木郷吉処事

右、得彼寺衆徒等去月日奏状稱、謹考案内、当

社者、尋本地者、中台八葉之心王、為三世常

住之法帝、思垂跡者、乾道七世之胤子、為八

荒鎮將之武神、是以地神第三代天津彦尊、始祐天野廟祠乎、称常世宮、人王十六代応神天皇、殊崇靈威乎、定山地境社者、是豐受太神開闢之瑞籬也、豈非日本最初之草創、神者亦八幡宗廟崇敬之靈驗也、旁播異國降伏之冥感、爰去文永年中以降、蒙古荐窺本朝、絳之怖畏、超于先規、国之安否、在于斯時、而弘安四年四月五日、同十二日、当社四所明神之中、三大神号蟻通神、託宣曰、日本国神々爰向蒙古、任先例、天野大明神可令向一陣給之由、議定既畢、吾為彼楯築、可懸初前也、而惣無武具鎗矢一手・弓絃一筋、来廿一日以前可令得之、明神進發者、来廿八日丑剋也、其時定可有瑞相、以不動火界呢、可增神威光、来六・七月中、本朝可成安全云々、取要、其後異国賊船、不知幾千万、充滿海上之由、鎮西早馬関東到来之間、万人変色、貴賤失度之処、彼託宣文披露之刻、人皆含隨喜、知神威不墜、仍自関東任彼託宣、被送献弓箭・御劔・幣帛等、然間合戦之後、如鎮西所進戊虜白状者、去四月四日蒙古賊船解纜之由載之、明神託宣相当、彼翌日自諸余社、各雖有靈威之聞、皆是凶賊猖狂、襲来之後也、兼謀未然之前、遙鑑絕域之外、示兩度之靈託、告四海之安危、当社効驗殊以嚴重也、四月廿一日社頭数千之郡鳥(郡)、只残一双手悉去、是則三大神前進兆也、同廿八日夜神殿鳴動、宛如地震、奇光赫奕、殆疑天変、明神出御瑞相也、七月廿九日暴風俄起、異国賊船一時滅亡、海内静謐、都鄙開眉、兼日之靈託、指掌乎符合、

関東献弓箭之処、鎮西有流失之瑞、又合戦之間、舟船之外、紅火交煙乎飛波頭、彩竜興風乎現海面云々、特誦火界之託宣、其証可謂在于眼、加之、閏七月晦日夜、撰州広田社巫女詣当社、而託宣曰、於今度者、住吉毛八幡毛属我力致征罰、若託吾覲示此事者、世以可疑故以汝令告示云々、又非真言教力、難施降伏靈驗之由、蒙八幡之御告、於当山有一万座不動供勸進之侶、以之思之、丹生明神之神変、勝于諸神也、非唯寄一社巫女之口、金剛乘教之教力超于余教、誰敢疑八幡正直之告、国之為国者、神明之擁護也、神之為神者、法味之威力也、冥助既揭焉也、報賽豈可疎哉、因茲、專抽関東匪石之懇棘、被避進泉州近木之地頭畢、弘安七年十二月十一日件寄進状稱、為聖朝安穩、異国降伏、殊有御祈願、所被避進也者、依鎌倉殿仰、奉寄如件云々、就之、関東既奉為聖朝安穩、避彼地頭職、公家亦為異国降伏、可避賜同国方之旨、代神慮達天聽之日、去正応三年三月廿七日院宣稱、高野山丹生社申、和泉国近木郷間事、被尋下国司之処、請文如此、此上者、遂可被寄進、且可存其旨云々、而同国卷尾寺住僧等、或号俊綱寄進状、或称国司庁宣、始構出正治・建仁之謀書、雖掠申、正応聖代之明時、於仁和寺宮被糺明兩方之処、卷尾寺之所申、謀書顯然之間、去年八月被下当社院宣稱、高野山丹生社申、和泉国近木郷事、卷尾寺住侶、称有俊綱寄進状、就申子細、無左右被付彼寺歟、而如金剛峯寺并国衙訴申者、俊綱狀等先々全不備進、非無不審之上、地頭職事、武

家既寄進、然者、停止卷尾寺知行、任以前勅約、永所被寄附丹生社也、異国降伏者、依神慮之令然、天下泰平者、在祈禱之異他、叡賞之余、所被寄彼郷也、衆徒等弥凝懇誠、宜致祈禱云々、同月日諭旨稱、和泉国近木郷所被寄附高野山丹生社也、殊令抽無弔之応薦稱、可奉祈万寿之宝祚云々、同七月国司庁宣稱、卷尾寺住侶等、称有俊綱寄進状雖掠賜、彼状先々全不備進、旁依有紕繆、其趣已被奏聞畢、然則停止卷尾寺知行、依異国降伏之賞、所被寄附高野山丹生社也者、永為当社領、殊可抽聖朝安穩・異国降伏之御祈禱也云々、然則既依公家・関東一揆之敬神、可為国衙・地頭一円之社領之由、早被下諭旨・院宣・国司庁宣等畢、此上者、任件等状永為当社領、不可有牢籠之由、為被成下官符・同牒、所令言上子細也、望請天恩、任諭旨・院宣・国司庁宣等、為当社一円之神領、早令庄号、停止勅事・院事・伊勢役夫工・造内裏已下大小国役、可致聖朝安穩・異国降伏精勤之由、且被下官符於国司、且被牒送子細於社家者、殊備異賊征罰專一之龜鑑、奉祈天長地久万代之鳳曆者、正三位行中納言藤原朝臣冬季宣、奉勅、依請者、同下知彼国既畢、寺宜承知、牒到准状、故牒、

正応六年三月廿八日修理東大寺大仏長宣正五位上行左大史兼能登介小槻宿禰  
右大弁正五位下行兼春宮大進平朝臣

29 天野宮造替日記

天野宮造替日記 嘉元三年 乙始之 巳始之

長者 随心院僧正 敵家

檢校 遍明院尊脱房頼盛

執行代 功德聚院敵脱房明豪

一十月十五日戊子 鬻宿 遷殿新始 火曜

四社同本社山上造之、

番匠大工右衛門二郎助近

大工代 彦太郎 清延

引頭四人 長五人

一同廿一日初夜時、祈禱行法始行之 經所六人東上臈 所司屋四人西上臈

一同廿七日丑時、借殿遷宮、於行法者、卯時結願畢、

祈禱次第

胎藏 良朝 賢願房阿闍梨 竜光院々主

金界成印 泉定房阿闍梨 弥勒院々主

千手寬庇 定林房阿闍梨 東禅院々主

弁才天定範 琳寛房阿闍梨 引撰院主主

愛染王房遍 誓忍房阿闍梨 智莊敵院々主

光明真言法慶忍 生頭房阿闍梨 相応院々主

自行法長算 円滝房阿闍梨 世尊院々主

心経法隆意 定本房阿闍梨 教持院々主

如意輪法信日 禅智房阿闍梨 大衆院々主

不動法覚和 日円房阿闍梨 三蔵院々主

一自同卅日、四社悉取破、

一四社造替事、四ヶ院任孔子分之、寺領同取孔子、

一宮 中院 荒川・天野・志賀 奉行月寿房阿闍梨・相達房阿闍梨・性乘房入寺

性本房入寺・如覚房入寺

二宮 南谷 名手・長谷・小川内

奉行頭円房阿闍梨・如達房阿闍梨・勝忍房阿闍梨 頭俊房入寺・証円房入寺

三宮 西院 官省符・毛原・長谷

奉行对俊房阿闍梨・唯禅房入寺・定仙房入寺 泉勝房入寺・如仙房入寺

四宮 谷上 三ヶ庄・古佐布・三谷

奉行要願房阿闍梨・慶俊房入寺・禅道房入寺 本親房入寺・空親房入寺

東惣社 中院 西惣社 南谷 若宮

檢校沙汰 奉行良祐長延房 戊宮番匠等造進之、上葺檜皮等沙汰之、

一同自十一月至十二月中旬、於食堂、四社之材木々々作畢、

作事之間番匠支藁等逐日四ヶ院各別沙汰之、

京番匠交名

惣大工中務丞助近 惣引頭彦太郎大夫清延

一宮引頭 鶴太夫末弘 二宮引頭 兵衛左官宗近

三宮引頭 乙次郎 四宮引頭 監物信国 長三郎有弘鶴太夫 舍弟

寺家大工 □智 定明 京番匠之大工寺家四ヶ日一度廻畢、

一同四年 丙 午 自正月廿四・五日、四院奉行衆天野止住

木屋構在之、毎日朝暮祈禱在之 理趣経巻 尊勝タラニ廿一反

中院木屋 御供所勝・南谷 御馬屋勝・西院 庵室前 谷上 御影堂并塔前構之

番匠御張雜所同構之

一自二月三日作事始之、番匠浄衣等寺衆沙汰下行之、

一同二月十九日居礎未剋無別儀云々、

一同二月廿日御柱立卯時、

同日及酉刻、番匠等社參立烏帽子・狩衣

大工束帶、

酒肴寺家沙汰、

同三月五、檜皮葺始之、

京都 勢王大夫

檜皮大工 左近允 寺家大工 隨智 修理大工 相賀

同三月十六日、上棟未時

祿物事

大工馬三疋之内 鞍置一疋惣執行沙汰、代三貫文

鞍置一疋証菩提院、裸一疋 河南執行沙汰 代二貫文

被物二重寺家沙汰

寺家大工二人 鞍置馬各一疋、壹疋田所沙汰、一疋名手下司 沙汰

一番堯智々次定明

惣引頭二疋 鞍置一疋名手公文沙汰

裸一疋 河北執行

一宮引頭一疋 鞍置麻生津庄官沙汰

被物壹重

同長裸馬一疋荒川下司

二宮引頭一疋 鞍置一疋、政所所司二疋、鞍置公方沙汰

被物一重

三宮引頭一疋 鞍置政所々司二疋内一疋、鞍公方沙汰

被物一重

同長裸馬一疋荒川惣追捕使

四宮引頭一疋 鞍置名手惣追捕使、鞍公方沙汰

被物一重

同長裸馬一匹荒川新庄下司

若宮引頭一疋 鞍置名手

社家大工一疋裸馬、荒川新庄 公文、鞍代一貫文

檜皮大工二疋 此内鞍置馬三ヶ庄沙汰、鞍公方沙汰 裸馬三ヶ庄沙汰沙汰

同一宮引頭一疋 裸馬 三ヶ庄沙汰

同二宮引頭一疋 裸馬 天野郷沙汰人沙汰

同三宮引頭一疋 裸馬 三ヶ沙汰人

同四宮引頭二疋 裸馬 小川内沙汰人

同高野大工一疋 裸馬 古佐布沙汰人 代壹貫

同修理大工一疋 裸馬 毛原郷沙汰人 代二貫

鍛冶大工一疋 裸馬 長谷沙汰人

仙人大工二疋 各一疋代各一貫 近木郷二疋 裸馬

山下番匠大工一疋 代一貫文 裸馬志賀

用途百貫京番匠中 三十貫 寺家番匠中 酒肴碗飯

酒肴碗飯 十五貫山家番匠

檜皮 酒肴 碗飯 鍛冶碗 仙人碗飯

仙奉行二人用途五貫

凡上棟之時、祿物之事大概注之、

番匠等悉長二着座、

一同六月十四日・五日、四所鑄并小社金物等悉以打畢、

御簾金物院々沙汰、但於御帳者、寺家沙汰、

同十五日申時、俄大雨下テ即晴、件雨天野許二

下云々、希代事也、

一同十五日寅時、奉入御体於新造御殿、惣綱奉負 子息一人隨身

御遷宮之間者、寺僧已下少々楽屋近辺 蹲踞而、

天野惣神主ノ四社・十二王子・若宮悉御進退所也、

28 金剛峯寺三沙汰人連署事書案

〔端裏書〕  
「建長八年 藤次舞事書」  
經会用途事

右於彼用途者、寺領之内、不除神社仏寺之免領并人給可納段米庄々本器定本庄供田定  
抑此一切經会者、殊為奉添明神之法樂、  
自中古之比、所被始修之也、而依事之過着  
反会之退転者、既<sup>非</sup>始行之本意、定違権現  
之冥慮歟、所詮雖為略儀不如不退、仍且  
推神慮且廻今案所定置也、未来永々  
不可違失之状、如件、

建長八年 丙辰 二月 日 預大法永賢判  
行事入寺静能判  
年預山籠賢詮判

33 金剛峯寺惣分長舜事書案

〔裏貼紙〕 「遷宮證文 天授二年」  
定 天野遷宮之事  
天授元年五月十五日丑時  
同天授元年十一月廿一日卯尅  
上遷宮天野惣神主ノ四社  
十二王子若宮悉御進退候、散  
供・散米・御幣へい・覆面・手袋・した幣ふす  
ひさすき・地布同コモ、器供土器提

ひさけ御精進供菓子御文カ□き  
同樽、其外供具悉調具進

上候、施物ノ事一社付而廿四貫文  
ツ、令進上候也、仍状如件、  
天授元年十二月吉日 高野山惣分長舜  
天野惣神主殿参人々御中

34 金剛峯寺学頭長清・長床年預快栄連署定文

永正十六年ツチノ五月七日ウシノ（丑）  
コクニ一宮下遷宮、二之宮・三之  
宮・四之宮・若宮、此分一度ニ  
下遷宮、此布施合九十  
六貫文、同若宮十貳貫文也、  
是悉惣神主先遷御進退候、  
同又サ三まい（枚）・へいはく悉と  
とのい進上申候、役人共之  
志付神主殿、ふ幣セ物十分一給之  
同二之宮・三宮・四宮ほ（祝）うり衆  
申事候つれ共、先宮付而、少も  
施物御座なく候、為後日證文、  
状如件、

衆徒学頭長清法印（花押）  
永正十六年ツチノ五月七日 満寺沙汰所  
天野 長床年預快栄（花押）  
惣神主殿 参

35 木食応其書状写

猶々今日吉日にて候間、  
大かた御用意の物したゝめ  
られ候て可給候、五日以前ニ  
案内きかせられたき由  
被仰候、ちかころよき  
仕合共ニ候、かへすく  
よくく御分別候て可給候、一藤坊へも  
拙者かたへも可給候、  
此外不申候、

下遷宮廿一日と申候て  
ならより来候、いぬ（戌）の剋ニも  
被得其意可成御用意候、  
一兩日者参軽之御造儀共ニ候、  
殊馬など祝着ニ存候、  
一へい（幣）三本 用意可申候  
一御しやうし供三（膳）せん  
一きく（木具）・かわら（土器）けミニ用意候、  
一地布も御影堂までし（敷）き可申候、  
一手（袋）ふくろ（覆面）・ふくめん（敷）などハ、其方  
御こしらへ候分ハ、たいいま  
注文被遊候て可給候、  
一あさ（麻）のをいかほと入申候や、可  
承候、  
一よくく御分別候て可給候  
御注文之外入事候ハ、只今  
具ニ可承候、  
一下遷宮あまりにハかに候間、  
諸事（簡略）かんりやくあるへき  
由、お（各々）の被申候、上遷宮之  
「（以下 下段）」

時ハ拙者随分馳走可申候、  
其段ハ(任)まかせをるへく候、只今ハ

惣分次第ニ御沙汰候て可給候、

一我等ニ御用之事候ハ、御社

ハ(拜殿)いてんニ大かた居可申候間、

それへ可給候、もしそれに(旨)い

申さず候ハ、(槍皮師)ひハたしは

いてんニ可申候間、御状等それに

(頭)あつけらるへし、いづれも大

かた一臈坊用意被申候、

施物なども被仰通ハ難調

やう(間)ニきこへ候、随分御馳走

可申候、相構先下遷宮ハ

此方次第可為肝要候、猶

追而従是可申候、恐々謹言、

九月十七日 本願応其 判

天正十一年ノ文のうつし

天野

神主殿 御宿所 応其

### 36 木食応其書状

猶々為集儀

此方にて上遷宮

用意仕候へと

下知ニ候条、六ヶ敷存候へ共

仕置候、此方へ可被懸

御意候、以上、

当社上遷宮

来廿六日戌剋

撰日候、然者悉

木具・土器等之

用意まで此方にて

仕候間、金堂之

穀屋へ直ニ可被

懸御意候、去十日ニ

御心得のため先

一筆ニ申越候、定而

可相届候、態人を

可進と申候へは、

明花院なども、此

方まで書状仕候て

置候ハ、可被相届之由

間 まで候へとも、以便宜

申候、於挨拶者はさま

可申候、恐々謹言、

天正十一年ヒツシノ年

御社本願木食

六月十三日 応其(花押)

天野

神主殿

御宿所

### 37 天正十年・十一年遷宮日記

(端裏書)「丹生玉澄之覚うつし 天正十年ノ」

高野山御社下遷宮ニ付□先一社也、別ニ有也、

天正十年 ムマノ九月廿一日 ヒノエ子日イノ時御影堂

中間へ下遷宮有也、治部太輔玉澄四拾七歳之時也、  
惣分一臈坊ハ五室明藏院まかなひ也、

本願ハ応其也、此方之役人ハ手長まこ三郎(孫)

千菊根本定行孫衛門登也、

五色ノ幣三本、シラキヌノ(幣)ヘイ三本、合六本也、

廳而明年二月十九日より造営アリ、まんさく

調也、

天正十老年 未ノ六月廿六日 ヒノエ子日(辰)イヌノ時上遷宮

有也、応其本願ゆへ金堂ノ(穀屋)こくやへ登、まか

ない有也、此度ハこと(悉)く応其勧進物ニテ

仕候間、此後のかたきに成間敷候也、布施之かる

き也、地布ノヌ(也)ノモ一社ノニテシマイ候也、地布ハ

十二タ(反)ン也、此内六タン御神官六人ニトラル、也、

ヒフンニテハ候へ共、神慮ニまかせ□□□□の外に□□

彼是少もよの人しる事なし、こと(珠)く神主

徳分也、同先年□西院・西方院一臈之時同 玖澄

登候て遷宮する也、第二度也、同□□やの時□□

にてあふ□□□三度にて候